

2023年度 こどもの木かげ・野のはな空のとり保育園 自己評価

保育所における自己評価ガイドラインより：「保育所が、保育士等の自己評価を踏まえ、全職員の共通理解のもと、組織としてより良い保育に向けた改善や充実に取り組むために行なう」

1. 基本理念・保育方針

■こどもの木かげ 2002 基本理念

『汝らは、地の塩、世の光である』
(マタイによる福音書5章第13節—14節)

キリスト教の愛の精神を基とし、幼な子が、自ら生きる力を高め、豊かな個性を育むことをめざしています。こどもの木かげ（玉成幼稚園・野のはな空のとり保育園）では、0歳から就学まで一貫した保育方針にもとづき子どもの育ちに取り組んでいます。

■ 野のはな空のとり保育園 保育方針・保育目標

『子どもが現在を最も良く生き、のぞましい未来をつくり出す力の基礎を培う』

子どものありのままの姿を受け入れ、健全な心身の発達をめざして、1人ひとりに丁寧に向き合って保育を行ないます。そうして子どもの最善の利益を尊重し、福祉を増進するにふさわしい生活の場をつくりまします。

- ・子どもたちがのびのびと自分を表現できる生活を大切にします
- ・具体的な経験を通して感性を育て、達成感を味わえる働きかけをします
- ・子どもの気持ちを受けとめ、基本的な生活習慣や人への信頼関係を育てます
- ・おとなとの愛着関係を育み、豊かな生活世界を拓げます

こんな子どもに育ってほしい…アルウィン学園のめざす子ども像

- ①生きる力の礎である「自らの力で探求し判断しながら人とのかかわりをととした生きる喜びや自己表現が達成」できるように
- ②「ひとりひとりが違ってよい」興味や得意なことを伸ばし個性豊かになれるように
- ③あそびをととして感性や知的能力・創造性・社会性を体得できるように

すべては環境から

安心して生活し、あそび「空間」環境と、優れた玩具や本物・良質な家具や調度品といった「物的」環境、子どもを愛し慈しむ心と自己研鑽を怠らない保育者という「人的」環境、これらが相まって子どもが主体的に学びの物語を紡ぐ、充実した「時間」の環境がつけられていきます

2. 活動状況と自己評価

【基本的事項】（こどもの木かげ共通）

◆こどもが、自らの力で取り組む姿勢が育ち、周囲とのかかわり高め、育ちあえているか

今年度は、年度途中での転園・入園が多かった。手づかみ食べや、自分でコップを両手で持ち上げて傾け、飲むという経験がなかった子どもが、わずか数日の間にそれを自分でやり、自分で食べる、飲むということの喜びや達成感を感じていくというプロセスは、感動的であった。また、同じクラスの在園児が、新入園児に対して優しく親切に接し、かかわりあいながらともに育つとはどんなに嬉しいかを自然に理解している姿をみることは喜ばしいことだった。

◆子どもたちに豊かな感性が育つようなとりくみや自発的なあそびをとりくめるように保育をおこなってきたか

今年度の環境プロジェクトは、絵本の環境について掘り下げた。絵本の選び方、配置の仕方、おとなと1対1で読む時の心構えなど、保育者が直接的に「人的環境」として対峙し、絵本を読んでもらう子どもの感性の育みを大きく左右する立場であることを学びあった。こどもの主体性を考え、つい保育者は声のかけすぎ・手伝いすぎ・関わりすぎになってしまうところを、その子の成長発達の様子を見極めてしっかり「待つ」「見守る」ことを強く意識した。

【重点的にとりくむ課題（今年度の事業計画から）】

◆ 保育実践の記述の学びを継続し、保育の質向上につなげる

毎日クラスでその日の子どもの姿、心の動きなどを語り合い、共有した。二人称記述は難しいと感じている職員もいるが、以前のように「～のようで」「～のようだ」といった、突き放しているような、また自信のないようにも受け取れる記述はなくなっている。ICTが今後どんなに進んでいっても、子どもの姿を「観る」力と「記録する」力が衰えることのないよう、心して研鑽を重ねていきたい。

◆ 業務改善と働きやすい職場づくりによって、保育の質向上につなげる

給食業務は、今年度からわずかながら幼稚園への提供量が減少したが、アレルギー対応と、もう1件の個別対応があったことと、0歳児クラスは低年齢児が多く、個別に形態の異なる離乳食を作る作業が年間を通して続いたため、業務の過重と煩雑さは減っていない。また、厨房職員の昼休憩の場所がなく、産業医の職場巡視では休憩時間は厨房以外の場所でリフレッシュするようにとの指導があった。0歳児クラス食事コーナーに移動して休憩が取れるようにしたいが、なかなか実現できていない。そのように依然として大変な中でも、食育活動の中心となって、保育園のみならず幼稚園の食育にも関わり、保育の質向上に貢献してくださっている。厨房職員の業務改善に更なる努力が必要である。

東京都福祉人材情報バンクシステムふくむすびに公表されている「働きやすい職場宣言」は、2回目の3年毎の更新手続きを行った。求職中の方にとって働く意欲が湧くような場所となるよう、少しずつ改善させてきた。おたより帳・日誌・指導計画の記録方法にも工夫を重ねてきた。2年前から取り入れた複写式は、狭い倉庫に保管場所がなく、早くも限界であった。手書きの良さは重々承知であり、続けたい気持ちはあるが、記録のICT化は避けて通れない。インクルージョン、多様性の観点からも、次年度から帳票管理アプリ導入に踏み切ることにした。このことで一つの記録がさまざまな書式に連動される。子どもの午睡中に行う大変比重の重い記録業務を軽減し、その分のエネルギーを子どもに向けられるようにしたい。その記録を主に行う事務時間の確保は継続した課題である。また手書きの分量が減ることによる語彙力の減少など、記録の力が損なわれることのないよう、内部研修などによる学びを続けたい。

◆ 保育所保育指針と、こどもの木かげの基本理念を踏まえた保育を実践する

三年毎の第三者評価でも、必ず「保育所保育指針」「基本理念」「事業計画」を理解し、遵守しているかが厳しく問われる。目に見えない保育の営みを可視化する大切なものさしであり、そのため各職員の自己評価にも、この三つの理解と実践を問う項目を立て、各々が自分事として考えるようにしている。今年度は特に「不適切保育とは何か」ということについて全体で考えてきた。その中でも、否定的な声かけ、ネガティブワードの使用について学びあった。自分はするはずのないこと、済ますのではなく、つい無意識にはしていないか、と我が身を振り返り検証することを習慣づけることで、結果的に理念に近づいていくことが出来ると考えている。日々地道な努力を積み重ねていきたい。

3. 今後の課題・取り組んでいきたいこと（中長期的視野に立って）

- ・今年度は年度当初、園児欠員ありのスタートだった。幸い、見学に来られた方が見学後すぐに区へ申し込みをされ、入園につながったことは喜ばしいことだった。今後少子化の影響はますます大きくなると予想される。転園された方の理由は、「延長保育」の実施の有無であった。しかし11時間以上の長時間保育は、木かげとしては実施する方向性は今のところ考えていない。延長保育を実施する園が圧倒的多数な現状の中にあって、厳しい状況である。2歳までしかない小規模園が選ばれる園であり続けるためには、3歳児以降の連携施設にも魅力を感じ、続けて通いたいという動機が得られることが重要である。木かげのどんな要素に強みを見出し、独自性を守ってゆけるのかを問われていると感じる。
- ・今年度から「木かげ会議」が新設された。当園の連携施設である玉成幼稚園と足並みをそろえ、協力して時代の変化の波に対応して行くための有意義な意見交換の場としていきたい。
- ・「子ども誰でも通園制度」に関しては、園舎の小ささ狭さの点で、当面は当園での実施は難しいと考える。しかし地域の子育て家庭への支援は、既存の保育園主催「親子ひろば」、幼稚園主催の「園庭開放」や「ふたつの芽」も含めた包括的な子育て支援の枠組みを更に充実させていく必要がある。

◀ こどもの木かげ運営委員会による評価 ▶

1 評価項目の達成及びとりくみ状況について

日々の保育を行う中で、常に保育内容、保育方法を見直し、より望ましいあり方を探求していることがとらえられた。各項目についての達成度も高く、園長をはじめとした全職員がその職務に真摯に向き合う姿勢がとらえられた。杉並区の指導検査による指導に対応し援助プランの書式を新たに作成したり、園での保育計画を保護者にも開示するなど、迅速かつ積極的な取り組みが行われていることは高く評価できる。

2 今後とりくむ課題

コロナの5類移行後も衛生管理を徹底して行い、子どもおよび職員の健康維持に努めているが、職員が心身ともにゆとりを持って保育に臨めるようにすることをめざし、産業医の指導にあった休憩場所とノンコンタクトタイムの確保について改善方法を探る取り組みをすすめることが必要であろう。保育園と幼稚園がともにある「こどもの木かげ」の特色をより一層活かせるように、幼稚園との連携を進展させていけるとよいと思われる。

3 総合所見

日頃より保育方針の見直しをしながら、そこにあらわされる保育理念を深く理解し、子どもの成長にふさわしい園としての保育方法を追求している姿をとらえることができる。子どもを育てることにおいて、園と家庭がよいパートナーシップをとることの実現にむけた様々な取り組みを今後も続けていってほしいと願っている。